智山教学について
―序説―

宮坂宥勝

今日、各宗の伝統的教学を「宗学」という。宗学については「各宗門の教義に関する学問」（『広辞苑』）であると説明されている。

宗学は江戸時代には宗乗といったのは周知のとおりであって、これは「自宗の宗義および教典」というのが一般的な理解で、宗乗というのに対して他宗の教法を余乗という。余乗のなかにはインド哲学なども含まれる。こうした宗乗・余乗はすでに古典語になっているといえよう。

いつ頃から宗乗を宗学と呼ぶようになったかは分からないが、それはさほど古い時代のことではないようである。一方また、「教学」―智山教学など―という語がある。これは「宗教の教義の理論と研究」（『広辞苑』）とある。したがって、宗学は特定の宗派に限定されるとしても、教学も宗学とほぼ同義語であると理解してよいであろう。

『現代仏教を知る大辞典』（金花舎刊、昭和五十五年七月）に宗学を捉える三つの視座を次のようにのべている。

㈠「仏教学」的アプローチをする宗学で、客観的立場で宗学をみたいというものである。

ここでいう仏教学は、一応、近代的仏教学の常道にしたがって研究する、すなわち客観的かつ実証的であって、し

たがって多分に文献学的な研究の立場をとるものと定めておく。

研究者は仏教以外の信仰をもっていても、とくに一般に信仰をもたなくても研究とは関わりない。ともかく純客観的な立場からする実証的な学問研究は、当然のことながら、ロゴス（語）中心的な学問になる。

この場合の「宗学」は、一般的な云い方をすれば Wissenschaft の対象となるべきものであろう。

㈡いわば宗教哲学的アプローチである。「これは生き生きとした個人の仏教信仰、実存的自己のたしかめをまず根底に置く。その実存を離れることなく、自らの信仰を通して把握された宗教的真実を論理的に言語表現する方法である」とされる。しかし、個人の信仰や宗教的体験、あるいは実践などが、どのように自宗の教義に関係するのであろうか。要するに教義の主体的な理解の仕方あるいは実存的解釈であって、そこには当然のことながら、たとえば歴史社会や時代状況に教義がどのように関わりあうかという問題意識も存するであろう。

㈢言語表現あるいは論理化というのは二義的意味しか持たないとする立場である。「生活実践そのもの」つまり禅的な表現をかりれば、「直示直参」あるいは、「実践参究」ともいうべきものが、とりもなおさず宗義であり、宗乗であり、宗教である、とする考え方である。これは㈠のロゴス中心の学問とは正反対であって非ロゴス的立場である。

したがって、この立場からすると、しばしば㈠の学（Wissenschaft）としての宗学は否定されがちである。すなわち「宗学が〝ロゴス中心的な学問であって、説明され得るものがすべて〟であるとするならば、図書館にゆけば、皆、本に書いてある」と極論されることにもなろう。

このようにしてまた、「宗学という言葉を考える場合には、宗というのはあくまでも信仰と実践というものとみていい」という見方もある。しかし、宗学をそのように限局して捉えるだけだと、無限に個別化されてしまい、普遍性をもった学としては成立しがたい難点がある。さらに、実は「はっきりした宗学の概念規定はなされていない」とも

いわれているのは、右のように宗学をどのような視点で捉えるかによってその対象内容が全く異なってしまうから、当然なことといわなければならないであろう。明治以後西欧の近代的な仏教研究法がわが国に移入されたので、宗学もまた方法論として、その影響を受け、いわゆるロゴス中心的な学問の面で発展を遂げてきたことは、まぎれもない事実である。また、歴史的にみても江戸時代までの宗学の主流はいわゆる訓詁注釈の学であったから、その意味ではやはりロゴス中心的であったといわなければならない。

ところで、他面また、宗学はたんなるロゴス中心的な学問だけでなく、自宗の信仰的根拠として、信仰や宗教的信条などと深く関わっている点で、一般の人文科学と異なっていることも確かである。宗教信仰や宗教的信条との関わりという点からすれば、宗学はキリスト教の神学に相当するといえよう。

神学すなわちセオロジー（Theology. フランス語 Theologie. ドイツ語 Theologie）はギリシャ語の theologia にもとづき、神（theos）についての言葉、教え（logos）が語義である。したがって、神学の概念はもちろん有神論的な宗教を対象とするヨーロッパ宗教学の立場からみたものである。たとえば、「宗教的な概念としては、ユダヤ教、イスラム教などの有神論的宗教がみずからの宗教性に基づいて自己のあり方を学問的方法論をもって反省、解説、説明する、特殊宗教の自己理解の学問的試みを意味する。この点で神学は宗教を普遍性に基づいて哲学的に研究する宗教哲学とも、客観的実証的に研究する宗教学、宗教史とも異なる」（『世界宗教大辞典』平凡社刊九二一頁）とする立場からすると、神学は宗教哲学とも、さらには宗教学、宗教史ともジャンルの違うところの「特殊宗教の自己整理の学問的試み」ということになるであろう。これを宗学に移しかえてみるならば、宗学の「学としての独自性」は宗教哲学や宗教学、宗教史の対象であり得ないものということになろう。

近代的な仏教学は、当然のことながら客観的実証的研究にもとづくものであるから、「仏教の学」もしくは「仏教

に関する学」（Buddhist Science）であって、その場合の仏教は宗教哲学のみならず哲学一般、宗教学、宗教史さらには思想史文化史等々の学問分野の対象となり得るものである。ところが、それらとは異なった宗学の独自性は、たとえば現代に生きる（自己）存在のあり方を問い、文化を形成する人間の根源的あり方を問い、また仏教を存在の根拠とし、実践的関与を最大限に重視する〝宗学〟でなければならない（廣澤隆之「ポスト戦後50年仏教、宗教研究」「仏教タイムス」九六年一月十一日号）という見解に、それを認めることができるであろう。

この場合には、客観的実証的な研究にもとづくところの「仏教学」ではなく、主体的実存的な研究としての、いわば「仏学」（Buddhology）すなわち広義の仏陀の学または仏陀となるべき学ということになる。後者の場合は、多分に実践に関与する点では、伝統的な仏教語を用いるとすればシクシャー（Śikṣā＝学、学処、修学）がそれに近いといえよう。

これは宗学をめぐる三つの視座のうちの第二に相当する。ただし、キリスト教神学のように宗教哲学とも異なるとすれば、第二の視座は除かなければならないが、宗学は神学のように厳密にドグマとして規定すべきものではないのではないかと思われる。またロゴス中心的な学問、すなわち近代的仏教学の研究法を排除したものであるべきはずのものでもないのは当然なことである。

これらを通じていえることは、二つある。一つは宗学における学問研究の自由であり、他は前記のような視座、したがって方法論の相違があることを認めなければならない、ということである。

以上のような宗学のゆるやかな概念規定をふまえて、まず伝統的な智山教学の内実を窺ってみることにしたい。

いうまでもなく智山教学は、大師教学に淵源し、中興の祖覚鑁の教学再興にもとづいて根嶺の教学を大成した頼瑜、聖憲を直接的な伝統起源としていることはいうまでもない。この故に、新義系真言宗では頼瑜を瑜公、聖憲を憲

公と尊称している。二公以後、秀吉の根来攻略によって壊滅後、専誉は長谷寺、玄宥は京都智積院において、それぞれ根嶺教学を再興してから、智豊両山において多くの学匠を輩出し、ことに元禄享保時代からは智豊両山ともに学問研究の全盛期を迎えたのであった。

智積院は学徒養成の学問所として「学山」の名声天下に知られたことは周知のとおりである。ほぼ二世紀に亘る教学研鑽の概要は『智山全書』『智山学匠著書目録』などにこれを窺うことができる。

村山正栄著『智積院史』第二十四章、〃一山の盛衰と智山の学風学問〃に「智山の学風学問　附智山学匠著述目録」の一節があり、これによって智山教学の特色が知られる。

第一世玄宥、第二世祐宜、第三世日誉はいずれも根来にあって新義学派を相承したが、第五世隆長以後、復古主義を立場として、もっぱら講釈し会通するをもって旨として、おのずから「渉臘該博の蒐集主義を重んずることとなりて、頗る考証的のものとなるに至ったのである」と。

これに対して「豊山は自由討究をもって学風とした」と。したがって「天明の三哲」のような特色ある偉材が世に出たことは、これまたよく知られているとおりである。

智山は第七世運敞が近代師と称され、豊山の亮汰とともに新義教学の双璧であったように、宗義の研究は『大疏第三重』を主として、ひとまず運敞が完成したといってよいであろう。

このようにして、宗乗の研究は運敞ならびにその門下によって、元禄・宝永の隆昌をみるに至るが、運敞以後は余乗の研究、とくに性相学の興起をみるようになり、智山教学の特徴はひとえに性相学にあるといって過言ではない程である。なかでも海応・信海は智山倶舎学の双璧と称せられる。

江戸時代後期には、さらに華厳、法華、因明の他に勝論・数論などの異教にも及ぶ広範囲な教学分野に亘る成果も

認められるが、三論についてはほとんど全く研究がなされていない。

これを要するに、根嶺教学の『大疏』と『釈論』との研究を主軸として性相学その他の研究がなされたのは、大師教学を構成する『大疏』と『釈論』の占める重要な意義もさることながら、十住心体系における各住心に対応する教学研究が主体である。したがって、『大疏』と『釈論』の研究は、二公の教学を敷衍し発展させたものであるといえよう。

然るに覚鑁の撰述に関する研究は微々たるものであることは、奇異の感すら抱かされる。すなわち新義教学は実質的には二公以後の展開であることが分かる。

次に、具体的な研究について概観してみることにしたい。

後代の注釈、解説その他の著作からみて、その対象となった宗祖撰述の主要なものは横竪の判釈のうち横の判釈である『弁顕密二教論』、竪の判釈である『秘密曼荼羅十住心論』『秘蔵宝鑰』および『即身成仏義』『声字実相義』『吽字義』の三部書、『般若心経秘鍵』など、その他開題類、事相関係*の撰述である。

これらについての覚鑁の撰述との対応を示すと、次のとおりである。

*事相関係の撰述は真偽を含めて『弘法大師全集』『興教大師全集』に収めてあり、その内容の検討はまだなされていないので、一応除くことにする。

両祖大師撰述対照表（*印は対応するものがないことを示す）

（宗祖）	（開山）
秘密曼荼羅十住心論……	秘密曼荼羅十住心略頌
	十住心論打聞集

秘蔵宝鑰……*
弁顕密二教論……顕密不同章・顕密不同頌
即身成仏義……真言宗即身成仏義章
声字実相義……法身説法頌
吽字義……*
般若心経秘鍵　　般若心経秘鍵略註
大毗盧遮那成仏経疏文次第……*
大日経疏要文記
釈論指事……真言所学釈摩訶衍論指事／釈摩訶衍論
愚案鈔（本）／同（未）
*……金剛頂瑜伽中発阿耨多羅三藐三菩提心論題釈
釈菩提心義
真言浄菩提心私記

新義真言の創始者である頼瑜の主著は、周知のとおり『大疏愚艸』と『釈論愚艸』である。これらは、『大疏』『釈論』ともに宗祖の『十住心論』『秘蔵宝鑰』などに援引する最重要な経釈、論釈なので、その研究を極めることを意図したところの大著であることはいうまでもない。

次に、宗祖の撰述についての頼瑜の注解もしくは研究には次のものがある。対照表によって示す。

（宗祖）　　（頼瑜）

十住心論……十住心論愚艸／十住心論衆毛鈔／十住心論勘文
宝鑰……宝鑰愚艸／宝鑰勘註
二教論……二教論愚艸／二教論指光鈔／顕密問答鈔
即身義……即身義顕得鈔／即身義愚艸／即身義別記
声字義……声字義愚艸／声字義開秘鈔
吽字義……吽字義愚艸／吽字義探宗記
心経秘鍵……秘鍵愚艸／秘鍵開蔵鈔／秘鍵初心鈔
真言二字義……真言二字義愚艸
御遺告……御遺告釈疑鈔
大疏……大疏愚艸／大疏指心鈔／序分義短冊／大日経疏縁起
釈論……釈論愚艸／釈論開解鈔／釈論短冊／釈論秘訣／釈論禅門決鈔／釈論鈔出／釈論序鈔
菩提心論……菩提心論愚艸／菩提心論初心鈔

開題類その他の愚艸に次のものがある。

金剛頂経開題愚艸／法華経開題愚艸／仁王経開題愚艸／最勝王経開題愚艸／大日経開題愚艸／梵網経開題愚艸／金剛経開愚艸／守護経釈愚艸／理趣経文句愚艸／陀羅尼義愚艸様図／秘鈔問答鈔／玄秘問答鈔／玄秘口訣／玄文鈔口訣／五重護摩鈔／灌頂私記／理宝口訣／理宗口訣／金界口訣／胎界口訣／沢見口訣／野月口訣／神訣鈔／香薬／印

可口訣／諸尊通用表白集など。

なお、教相関係の撰述には、次のものがある。

十八会指帰鈔／阿字秘釈／瑜祇経拾古鈔／瑜祇経釈法華大意／真俗雑記問答鈔

余乗関係では、次のものがある。

五経章料簡／唯識論料簡／頌疏料簡／頌疏料簡鈔／持犯

事相関係では、次のものがある。

十八道口訣／野金鈔／野胎鈔／金剛界発慧鈔／胎蔵入理鈔／護摩口訣／薄草紙口訣／諸流次第秘記／石山道場観記／妙鈔記／阿弥陀大心鈔／字輪観／入我我入観／阿弥陀護摩次第／光明真言護摩／普賢延命護摩／大勝金剛護摩／六字護摩／如法愛染法／如法尊勝法／転法輪護摩／北斗護摩／愛染法護摩／薬師供次第／聖天供次第／童子経供養作法／却温経供養作法／摩怛利神法／諸尊法略次第／泥塔供作法／朝暮護身作法／灌頂私記／灌頂坦要記略鈔／宗要略鈔／古迹料簡／八識義鈔／義尊八識義愚艸

頼瑜は東大寺で三論、華厳を、興福寺で瑜伽唯識を、東大寺真言院で密教を学んでいる。

これは宗祖、覚鑁の綜合学としての密教を踏襲したものである。

年代の判明する密教関係の著作だけを年代順にあげると、次のとおりである。

正嘉元年（一二五七）『住心論愚草』『即身義頭得鈔』

〃　二年（一二五八）『釈論開解鈔』

弘長元年（一二六一）『大疏指心鈔』起草

〃　二年（一二六二）『薄双子口決』『大乗義章』首巻　『八識義鈔』

文永六年（一二六九）『即身義愚草』
〃　八年（一二七一）『十住心論愚艸』
〃　九年（一二七二）『菩提心論愚艸』
建治元年（一二七五）『大疏愚艸』加筆
〃　三年（一二七七）『秘鍵愚艸』鈔録
弘安三年（一二八〇）『声字義開秘鈔』『吽字義愚艸』
〃　四年（一二八一）『阿字秘釈』『釈論愚艸』『十住心論衆毛鈔』など起草
〃　七年（一二八四）『瑜祇経拾古鈔』
永仁三年（一二九五）『宝鑰勘註』
正安三年（一三〇一）『理趣経文句愚艸』『釈論愚艸』

以上、頼瑜は宗祖撰述について幅広く注解し、あるいは数多くの著作をものしていることが知られる。頼瑜教学の大成者と目される聖憲の場合は『大疏百条第三重』一〇巻、『釈論第三重』一〇巻が主著で、その教学はほとんど『大疏』『釈論』に限られる。その他には次のような若干の著作がある。

華厳五教章聴鈔／自証説法十八段／病中寓言鈔（一名、阿字観鈔）／王心鈔

両公の著作は十住心体系に即していえば、第九住心の華厳、第六住心の法相（唯識）の著作があるが、大乗のうちでは天台、三論に関するものは現存する著作に限っての場合のことであるが、全く存しない。

次に、智山教学について両部大経、大疏、釈論、菩提心論など、宗祖撰述、覚鑁撰述の順序で著作を一括してみることにしたい。

〈両部大経〉

I 大日経

亮典『大日経住心品科』一巻

運敞『大日経劫心義章』三巻

亮元『大日経蒿測鈔』八〇巻

曇寂『大日経私記』八五巻

〃　『大日経教主義』一巻

〃　『如実知自心』

亮海『大日経教主古今異説集』一巻

良恭『大日経住心品科』一巻

信海『大日経乱脱私』一巻

II 金剛頂経

道空『金剛頂名義』一巻

〃　『略出経中薩嚩伽座記』一巻

曇寂『金剛頂大教王経私記』一九巻

〃　『金剛頂経私記追検』五巻

隆瑜『教王経私記傍観』第一　一巻

〃　『教王経私記傍観余言』三巻

〃　『大教王経余意』一巻

〈大疏〉

玄宥　『大疏第三重聴書第六』一巻

祐宜　『大疏百条第三重読曲』一巻

〃　『大疏第三重初後心抄』二巻

〃　『大疏第三重疎決論義重々記』五巻

元寿　『大疏第三重第六』一巻

〃　『疏第六』一巻

運敞　『大疏第三重啓蒙』五八巻

〃　『冠註住心品疏略解助講』九巻

〃　『大疏百条第二重』一巻

〃　『大疏談義』二巻

亮元　『大日経疏爛脱辨』一巻

慈観　『住心品疏略解助講』六巻（此本未見）

覚眼　『大日経疏住心品疏冠註』八巻

〃　『大日経疏拾義鈔』十巻

義山　『大疏第七行母録』一巻

道空　『大日経疏条解』八巻
曇寂　『大日経疏追記』一八巻
亮海　『大疏講録』十巻
浄空　『大日経疏鈔執中』四八巻
〃　『大疏執中玄譚』一巻
動潮　『大日経奥疏聞書』二巻
浄光　『大日経奥疏聴要記』一巻
謙順　『大疏随類』二十巻
〃　『大疏第三第五評記』一巻
良恭　『住心品疏試講』
弘道　『大日経疏伝灯記』二十巻
〃　『大毘盧遮那経教主義』一巻
元瑜　『住心品疏講翼』一七巻
〃　『住心品疏随意録』十巻
〃　『大疏伝通記』六巻
〃　『大疏根嶽記』五巻
〃　『大疏第三南勝記』二巻
〃　『大疏第三重了簡章』一巻

〃　『大疏第三重第七』一巻
〃　『大疏第三重第八第九第十了簡章』一巻
宥豊　『大疏第三重私記』十巻
海応　『大日経奥疏分科』六巻
〃　『大日経口疏第一目聴記』一巻
〃　『大疏第三重得意』十巻
住阿　『大日経疏講翼』三巻
良空　『大疏第三重第六良空記』一巻
隆瑜　『大日経疏拾要記』五二巻
〃　『住心品疏講記』十一巻
〃　『大日経供養次第法疏私記付録』六巻
〃　『大疏第三重私記』三巻
〃　『大疏第三重第一十料簡章』一巻
〃　『大疏第三重第三集要記』一巻
〃　『大疏第三重四巻記』一巻
信海　『大疏伝授私記』三巻
隆願　『大毘盧遮那成仏経奥疏講演』二巻
弘現　『大疏第三重王見録』八巻

芳勝　『大疏第三重私記』八巻
〃　『大疏第三重第壹私記』一巻
教如　『大疏第三重論艸』三二巻

右にみるように、聖憲『大疏第三重（大疏百条第三重）』一一巻の研究が智山教学の『大疏』に関する著作の主流を占めていることが知られる。なお、この聖憲の著作は『住心品疏』の疑義百条について問答を重ね、第三重で決択することは知られるとおりである。

〈釈論〉

玄宥　『釈摩訶衍論破難抄』一巻
〃　『釈論百条第五内無明住地聞書』一巻
祐宜　『釈論百条第三重読曲』一巻
〃　『釈論知小口鈔』六巻
〃　『釈論第三重初後心鈔』五巻
〃　『釈論解説第三重々記』三巻
〃　『釈論第三重最極愚案鈔』一巻
運敞　『釈論第三重啓蒙』三五巻
〃　『釈論談義』二巻
〃　『釈論第二重』一巻

覚眼　『釈摩訶衍論科註』二十巻
亮海　『釈摩訶衍論講録』七巻
良恭　『釈論敲推録』三四巻
隆瑜　『釈論聞書』一巻
信海　『釈論真僞』一巻

〈菩提心論〉

恵照　『菩提心論観心鈔』二巻
覚眼　『菩提心論撮義鈔』一巻
曇寂　『菩提心論私記附追記』五巻
亮海　『菩提心論講筵』一巻
良恭　『発菩提心論講讃』二巻
宥豊　『発菩提心論講柄』三巻
隆瑜　『菩提心論拾要記』三巻
信海　『菩提心論愚案私記』一巻
芳勝　『発菩提心論私記』一巻
教如　『発菩提心論講翼』一巻

〈天台・華厳・法華の研究〉

観応　『華厳五教章冠註』十巻
道空　『法華提婆達多品義』一巻
亮海　『華厳五教章講録』十五巻
〃　『四明十義書愚案記』四巻
〃　『三論玄義抜出記』七巻
〃　『三論玄義別録』一巻
謙順　『大華厳略策海滴』二巻
〃　『五教章玄談』一巻
〃　『諸宗章疏録』三巻
良恭　『五教章拾義』十三巻
〃　『四教儀集註私記』十巻
理天　『法華文句聴聞記』九巻
元瑜　『天台四教儀集註聞記』一巻
海応　『華厳玄談条目』一巻
〃　『華厳探玄記条目』二巻
〃　『華厳五教章冠註条目』一巻
〃　『華厳五教章冠註決択鈔』一巻

〃　『教儀集註図解』一巻
〃　『法華玄賛条目』一巻
隆瑜　『法華経釈拾要記』二巻
〃　『五教章聞書』二巻
〃　『四教儀集註談柄後記』一巻
隆願　『五教章玄談』一巻
隆栄　『天台四教儀集註玄譚』一巻
〃　『大乗法苑義林分科』六巻
弘現　『大乗法苑義林章分科私』一巻
〃　『大乗法苑義林章王見記』二巻
〃　『義林唯識義章条目』一巻
〃　『成唯識論述記聞書』八巻
〃　『唯識述記分科』三巻
〃　『成唯識述記王見録』一巻
〃　『成唯識論述記外小破文科』一巻
〃　『観心覚夢鈔分科』一巻
〃　『三類境選要分科』一巻
〃　『三類境私記』一巻

〃　『百法問答鈔分科』一巻
〃　『百法問答鈔私記』四巻

〈外教および因明の研究〉

亮海　『因明三十三過本作法纂解講録』三巻
〃　『因明論大疏判談記』一巻
浄空　『因明講述』五巻
良俊　『科註因明入正理論』一巻
海応　『勝宗十句義刊定記』一巻
〃　『因明瑞源訣択記』六巻
〃　『金七十論啓義』三巻
隆瑜　『三十三過本作法纂解談柄』一巻
〃　『十句義論釈聞書』一巻
弘現　『因明三十三過本作法纂解分科』一巻
存教　『冠導勝宗十句義論』一巻
〃　『因明三十三過纂解釈記』二巻
芳勝　『勝宗十句義論私記』一巻
〃　『金七十論私記』一巻

〃　『因明入正理論科註私記』一巻
教如　『因明入正理論疏瑞源記』四巻

〈宗祖撰述〉

祐宜　『般若心経秘鍵直談鈔』二巻
〃　『御遺告私類聚』二巻
亮典　『般若心経秘鍵文林』一巻
運敞　『秘蔵宝鑰纂解　附問』七巻
〃　『秘密漫荼羅教付法伝纂解』＊五巻
〃　『三教指帰註冊補』＊七巻
〃　『性霊集鈔』＊十七巻
〃　『遍照発揮性霊集便蒙』＊十巻
秀見　『付法伝纂解聞書』＊五巻
観応　『御遺告私記』＊三巻
覚眼　『即身義撮義鈔』二巻
〃　『声字義撮義鈔』三巻
〃　『吽字義撮義鈔』三巻
〃　『顕密二教論撮義鈔』六巻

〃　『宝鑰撮義鈔』六巻
〃　『般若心経秘鍵撮義鈔』二巻
實貫　『宝鑰纂解序註』一巻
〃　『秘蔵宝鑰纂解鈔』七巻
〃　『付法伝纂解序註』一巻
〃　『付法伝纂解鈔』六巻
〃　『三教指帰冊　補鈔』九巻
〃　『性霊集便蒙鈔』一八巻
〃　『性霊集考語』五巻（此本未見）
曇寂　『即身義私記』五巻
〃　『即身義追記』二巻
〃　『声字義私記』三巻
〃　『吽字義私記』三巻
〃　『二教論私記』六巻
〃　『秘蔵宝鑰纂解傍観』三巻
〃　『般若心経秘鍵私記』四巻
兼澄　『真言二字義考要』二巻
〃　『大日経開題口筆』二巻

〃　『大日経開題義釈』一巻
亮海　『秘密曼荼羅十住心論冠註』十巻
亮海　『即身成仏義講筵』三巻
〃　『声字義講筵』三巻
〃　『吽字義講筵』三巻
〃　『弁顕密二教論講録』六巻
〃　『秘蔵宝鑰講筵』一三巻
〃　『般若心経秘鍵講筵』三巻
良恭　『即身成仏義講述』二巻
〃　『声字実相義撮要』二巻
〃　『吽字義講述』二巻
〃　『二教論講述』六巻
〃　『宝鑰講述』一二巻
〃　『般若心経秘鍵講述』二巻
元瑜　『即身成仏義講翼』三巻
〃　『声字実相義講翼』二巻
〃　『吽字義講翼』二巻
〃　『弁顕密二教論講翼』六巻

〃　『秘蔵宝鑰講翼』九巻
〃　『般若心経秘鍵講翼』二巻
宥豊　『即身成仏義講柄』一巻
〃　『秘蔵宝鑰科文』一巻
〃　『般若心経秘鍵補忘』三巻
頼恭　『般若心経秘鍵見聞記』一巻
海応　『声吽般若科目』一巻
〃　『弁顕密二教論分科』一巻
〃　『二教論科目』一巻
〃　『秘蔵宝鑰分科』一巻
隆瑜　『即身成仏義弁義鈔』二巻
〃　『秘蔵宝鑰補記』十巻
〃　『秘蔵記拾要記』九巻
〃　『付法伝纂解講柄』四巻
〃　『菩提心論拾要記』三巻
俊澄　『秘蔵宝鑰評記』九巻
弘元　『十巻章私記』（此本未現）
〃　『即身義分科』一巻

〃　『二教論分科』一巻
〃　『宝鑰分科』一巻
存教　『即身成仏義異義雑記』一巻
〃　『秘蔵宝鑰聞書』二巻
〃　『秘蔵宝鑰補講』一巻
〃　『秘蔵宝鑰異義雑記』一巻
芳勝　『冠註十住心論私記』一巻
〃　『即身成仏義私記』一巻
〃　『声字義玄談　私記』一巻
〃　『吽字義私記』一巻
〃　『般若心経秘鍵私記』一巻
教如　『十巻章分科』一巻
〃　『般若心経秘鍵愚案記』一巻
〃　『秘蔵宝鑰私記』一巻

右のうち＊印のこれら『付法伝』(広略)、『三教指帰』、『性霊集』は、頼瑜、聖憲の取りあげなかったものである。江戸時代中期に至って、ようやく祖典研究のレパートリーがひろがったことを物語るといえよう。それにしても、宗祖撰述に関する注解あるいは研究書が圧倒的に多いのは智山教学の大きな特色であり、とくに『三教指帰』や『性霊集』にまで及んでいるのは高野山をはじめ他の真言教学ではみられないところである。

覚鑁または根来関係では、日誉『根来破滅記』一巻／信盛『請密厳上人諡号表』一巻、運敞『結網集』上・下巻のうちの上巻に収める『密厳尊者年譜』および『密厳尊者略年譜』一巻の他、良俊『月輪観頌釈』一巻、隆瑜の『五輪九字秘釈拾要記』五巻が存する。また覚鑁撰述については『密厳諸秘釈』十巻の編者は不詳だが、旧版は豊山版で、新版は智山第二十二世能化の動潮が発願し、謙順、東岳、通明らによって天明四年（一七八四）に旧版を改訂増補して出版している。なお『密厳遺教録』四巻は天明二年（一七八二）に豊山で出版した。諸秘釈との重複は三種である。

以上、智山教学は宗祖の撰述では『十住心論』の研究が極めて少ないのは奇異の感すらある。『宝鑰』に関する著作が最多で、ついで、『秘鍵』、以下『即身義』『二教論』『声字義』『吽字義』、さらに『性霊集』『三教指帰』『大日経開題』などである。

また、覚鑁の撰述についての研究も前記の良俊、隆瑜などの著作があるだけで、これまた微々たるものにすぎない。したがって「開山大師」とされながらも、覚鑁教学の発展はみられない。

両部大経のうち『大日経』は住心品を主とし、また教主義に関する撰述がいくつかあるのは教主をめぐり新古の相違があるのによる。『金剛頂経』は『大日経』に比べてその研究は周知のとおり、曇寂らの著作があるにすぎない。『大疏』の研究はおびただしいが、前述のようにこれらは主として聖憲の『大疏第三重』に関するもので、根嶺以来の『大疏』を中心とする論義の教相的な裏付けあるいは教理的理解に資するためであったと思われる。

前述のように根嶺・智山の教学を特色づけるのは『大疏』『釈論』さらには『菩提心論』の研究である。これらは十住心体系に即していえば、第十秘密荘厳心の理解に資するためのものである。しかるに、華天両一乗というが、第九極無自性心に配される華厳、第八一道無爲心に配される天台については僅か天台四教儀に関する著作があるのみで

ある。

江戸中期以後の智山教学は、性相学の隆盛を極めた。すなわち『成唯識論』『大乗法苑義林章』『倶舎論』などが主要な対象として取りあげられている。十住心体系に即していうと、第六他縁大乗心が唯識法相であり、また第五抜業因種心あるいは第四唯蘊無我心などに相当する倶舎婆沙の研究は多い。が、第七覚心不生心に相当する三論の研究が皆無に等しいのはどうしたわけであろうか。江戸時代の八宗兼学の風潮によるものか、あるいは十住心体系はほとんど研究対象の意識にのぼらなかったものなのだろうか。

さらに、勝論、数論、因明、梵字梵学に関する著作は、高野山教学あるいは江戸時代の各宗の余乗の研究に影響されたものか。また『異部宗輪論』の研究があるのは仏教史的な関心にもとづくものだろうか、あるいは倶舎論研究における有部の教理的位置づけを理解するためだったのだろうか。これらの研究が一般的に何を企図したものかは、今後の解明に俟つべきもののひとつだと思われる。

また『理趣経』その他の顕密にわたる経典研究などがある。

智山教学では運敞が聖憲の『大疏第三重』を研究した『大疏啓蒙』五八巻と『性霊集便蒙』一〇巻、亮元の『大日経蒿測鈔』八〇巻、大寂の『梵漢標目』三〇巻、曇寂の『金剛頂大教王経私記』一九巻、智山倶舎学の双璧をなす海応・信海の諸著作が特にすぐれたものだといえよう（『智山全書・解題』参照）。

江戸時代の高野山教学は歴史研究が主であった。余乗研究は殊に智豊教学を特色づけるものである。

高野山教学は応永の大成といわれる宥快に負うところ少なくない。が、『一言芳談』に「高野山に登る」というのは、『釈論』と悉曇を学ぶことを意味したほどである。

智山教学も根嶺教学にもとづいている以上、『大疏』と『釈論』を中心に据えているが、江戸中期以後、研究のレ

パートリーは著しくひろがった。歴史的な背景を考慮に入れるならば、あるいは宗祖の綜合的教学すなわち十住心体系にもとづくならば、これは当然なこととして首肯されよう。

智山教学の問題点については、『大疏』『釈論』をはじめとしてその他を吟味しながら、さらに詳細に考察を加えていきたいが、本稿は序説なので、今後の研究の目途とすべきものを思いつくがままに記して、まとめとしたまでである。

㈠両部大経・宗祖の撰述に学ぶことは、真言宗他派の場合と相違ない。

㈡根嶺・智山の伝統教学を検討吟味して、その特色を明らかにし、さらにはそれにもとづいた教学の継承発展をはからなければならない。

㈢伝統教学に必ずしも執われる必要はない。が、歴史的思想的に何らかの確固とした教学を根拠としなければ、宗団存立の理由を喪失することになる。

㈣現代の諸問題、時代意識にもとづいて新教学を構築することが要請されている。この場合もまたロゴス中心の宗学すなわち「仏教学」と「実践的関与を最大限に重視する宗学」すなわち「仏学」を両立させていくことが、必要条件であるというのが、智山教学の伝統重視の立場からする筆者の確信である。

（未完）

〔付記〕明治以降、現在に至るまでの智山教学の歩みについては他日、稿を改めて発表する予定である。